

エビスコウ習俗の再検討

水 谷 類

はじめに

市史研究2号でも報告されたが、国府台地域では正月と12月のエビスダイコク行事が実際に丁寧に行われている。周辺地域は言うにおよばず関東地方全体を見渡しても類例のないほど内容豊かなエビスコウ行事が、今も市内で立派に行われていることが判明し、おおいに注目している。

国府台はじめ市内のエビスコウ行事については、かつての市史関連調査で迎米（現・大野2丁目）のものが報告されている（『市川市民俗調査概報（1）』昭和46年）。それには、「二十日正月 1月20日。エビスコウであり、神棚から恵比須大黒の像を床の間におろし、一升枡に金を入れて供える。また御神酒、頭付の魚も供える。この日は、恵比須の「かせぎ」に出る日と称し、枡に入れて供える金も少なめにする。」とあり、11月のエビスコウについても「恵比須講 11月20日。この日は恵比須が帰ってくる日と称しており、各家によって恵比須講の祭日は異なる。家によっては12月に入ってから行う家もあると言われている。これは恵比須のカセギを多くするために、11月20日以前に行う家はない。恵比須の帰ってくる日は、1月20日の恵比須がかせぎに出かける日よりも御馳走も多く盛大にする。枡に家のあり金を全部入れる」とある。

エビスコウ行事はほぼ全国的な家の行事であり、引用した内容を見る限り、それほど特徴のあるものとは言えなかった。しかし今回の調査で、実際には驚くほど豊かな伝承内容を保持していることが判明した。

エビスコウではないが、石川県能登地方で行われているアエノコト行事（国指定無形民俗文化財・世界無形文化遺産）で有名なシーンがある。家の主人が袴あるいは羽織姿で恭しく、田からお迎えした田の神さまを座敷に招き入れ、用意したご馳走の内容を説明して供した後、お風呂に案内する場面である。神妙な面持ちの主人が現代的な風呂場と浴槽を前に、神さまにお湯の出し方などを説明するくだりがある。蛇口をひねるだけで容易にお湯の出る現代の浴槽が、「田の神祭り」という前近代的な風習と不思議な違和感を醸し出している。

アエノコトは戦後、広く全国に紹介され、この映像を見た多くの日本人は、自分